

『東北民俗』三十六輯 抜刷 東北民俗の会 二〇〇二年六月

アンドリュース・デール ● *Andrews, K, Dale*

津軽のカミサマの成巫過程 — 守り神を手がかりに —

The Role of Protectorate Deities in the Initiation Process of *Tsugaru Kamisama* (Shaman)

津軽のカミサマの成巫過程

— 守り神を手がかりに —

アンドリューズ・デール

一、はじめに

日本列島の最北端、津軽地方にはカミサマと呼ばれる民間宗教者が多数活躍し、この地方の信仰風景において無視できない存在となっている。カミサマは「靈感」と呼ばれる特殊能力をもつことから、地域社会において祈祷師あるいは霊媒者といった社会的役割を果たしている。

ここで注目する「守り神」とは、カミサマに靈感を与える存在であり、カミサマがシヨウバイする現場で、カミサマと一体化する神仏のことである。従って守り神は、カミサマがカミサマとなり、カミサマとしての機能を果たすための要ともいえるべき存在と見なすことができる。しかし従来まで行われてきたカミサマの成巫過程研究においては、彼らが守り神を獲得するプロセスは、等閑視される傾向にあった。そこで本稿では、現在活動中の津軽のカミサマを具体的事例として取り上げ、その事例の中からカミサマと

守り神との関係を明らかにしたいと思う。

二、津軽のカミサマの事例研究

(一) 個人史

ここで事例とするカミサマMは、昭和十七年に青森県弘前市に生まれた女性である。教師をしていた父は、北海道の出身で、弘前市に転居した後、同市出身の母と出会って結婚し、五人の子供をもうけた。Mは若い時から体も丈夫で、好奇心の旺盛な子供であった。歴史書を中心とした本を読むのが好きで、とりわけ仏教に関するものに関心があつたという。筆者の実施した聞き取り調査において、Mは他人ととりたてて変わったところはないことを、しばしば強調した。心身の機能不全に陥ったことなど全くなく、しいて言うなら、感受性の強いのが彼女の特徴であつたという。そのため、例えば映画を見ると、彼女は主人公になりきってしまうことがよくあつた。そのような感情移入の状態は一週間ほど続く場合もあり、映画などの刺激的印象が、普通の人よりは長く強く持続することが常であつた。それ故「嫌なものをテレビで見ると、大体一週間ぐらいそれが目にチラチラと映る。だから、小さい時から嫌な番組をあまり見たいと思わなかった。感受性が強いから、どうしても頭の中に影響が残ってしまう」というのである。

二十三歳（昭和四十年）のとき、同じ弘前市に生まれた

夫のところ嫁いだ。以後、彼女は家庭に入つて主婦として生活してきた。夫はその頃、会社勤めをしていた。翌年には長男が生まれ、二十八歳までの間に合計三人の子供が生まれた。昭和四十六年、二十九歳になった頃から、彼女は急速に身体が衰えてきた。先ず身体全体に不調がおこり、さまざまな症状が次々に現れてきた。頭痛・食欲不振・内臓の機能不全といった具合に不調が進み、身体の機能不全に陥ってしまったのである。いくつもの病院で診察を受けたが、どこへ行つても治ることはなく、「そのようなどん底から這い上がる道は、最終的には一つしかなかった」とMは当時を振り返る。それは、病氣平癒のために宗教的修行に入ることであった。幼い子供が二人いる他に乳飲み子を抱えていた彼女が、病氣を理由に母の役割を果たせなかつたことは、彼女の大きな心労となつていたことは想像に難くない。当時の様子を彼女は「子供置いて、子供を家に残して山に入つたわけですよ。だから、苦しい、一番苦しかった」と振り返る。この頃は、家族と起居を共に出来ないう時期であった。Mは病氣にかかつたことそれ自体を、今では修行の一つ、いわば修行の始まりと解釈している。

修行の道は一つだけではないとMは言う。Mの場合、津軽地方のさまざまな聖地を参拝して廻ることで修行を開始した。各地の寺社などでは「百度参り」を行い、とりわけ行場として名高い、岩木山北面に位置する赤倉沢では、そ

これは、彼女にとつて初めての宗教経験であつた。さらには先祖の犯した罪惡を知つた彼女が赤倉の龍神に懺悔した際には、靈感で超自然的な存在を強く感じた。「それが生まれる時から私の〈宿命〉だと思つています。私は自分でそう〈悟つた〉と彼女は語る。そこで彼女は自分に憑いているものを祓い始めた。祓いを始めると共に、いろいろな神仏が次第に彼女の前に現れた。彼女は憑かれた瞬間、その神仏との「眠つている」関係を悟り、それらの神仏を守り神として祀ることにした。最初の憑依以来、守り神から授けられた力が次第に増えてきて、以後〈宿命〉に導かれたMは修行を続けながら、カミサマとして人を助ける仕事を開始した。「私は悩んでいる皆さんを助けて行かなくちゃ。そういう誓いと言えば良いかな。そういう約束をした」と彼女は述べる。これがMのほぼ二〇年間に及ぶ仕事の始まりであり、この特別な出来事がMのその後の人生に非常に大きな影響を及ぼすこととなつた。依頼を受けるようになったら、カミサマという自分の仕事の方向が固まつてきたのである。以後、次第に師匠から距離をおくようになった。

自分の〈宿命〉が赤倉ではつきり現れたとMは言う。その時、彼女の〈宿命〉は病氣や修行の原因であることが明らかになつた。〈宿命〉に反抗することは病氣を続けることだけであるため、彼女は自分の〈宿命〉に従つた。Mの人

こに点々と建つお堂や道場へ籠つて修行した。

寺社を廻つてゐる内に、赤倉で「師匠」と知り合つた。その契機は、彼女が依頼者として相談に行つたことであつた。その後Mはその「師匠」に弟子入りすることになつた。二十九歳から三十五歳の間のことについて、彼女は多くを語りたがらない。この間のことをはつきりと覚えていないというのである。そのような中、赤倉沢の行場で初めて憑依を経験したことは印象に残つてゐる。師匠が太鼓を叩いて折袴中、彼女は突然意識を失つたのである。その時彼女は蛇のような動きをし、右手で頭、左手で尻尾を表すようにして赤倉の龍神の格好をとつたとされる。

赤倉の龍神が憑依したことを、彼女は先祖から貰つた因縁に起因するものと解釈する。昔、夫の先祖が蛇を小川に流して殺したことがあり、その殺された蛇が、龍神の化身であつた。そのため龍神は、夫の家系に祟つたのである。しかし先祖の罪業に対する祟りを受けたのは、M一人だけであつた。それはMによると、彼女自身が「感じやすい人」であつたためである。そのため、何百年か経た祟りが彼女一人に降りかかつたのである。龍神がMに乗り移つたことで、初めて彼女が祟られたことが明らかになつた。そこでその祟られた状態を克服するため、先祖の犯した悪行を、彼女が代わつて龍神に謝罪したのである。こうして彼女と龍神、または先祖との関係は修復した。

生は〈宿命〉で決められており、カミサマになることは生まれつきからの〈宿命〉だと解釈している。

病氣との関係でみると、後にカミサマになるような人だからこそ、一刻も早く普通の生活に戻れるようにと強く切望していたとも考えられよう。赤倉沢で修行していた時のMは、紙一重でノイローゼになるところであつた。しかしそのような彼女も、修行を積む内、次第にそのような危機的状况から解放されてきた。結局Mは、自分の病氣に正面から立ち向かうことで、完治された状態に至つたのである。平成二年、弘前市内の高野山真言宗の寺で得度式をし、彼女は出家した。翌年には、和歌山県伊都郡の高野町にある本山へ修行に行つた。そこで密教を勉強する中で一五日間を過ごした。

そこでは、「投花」という儀式に参加した。これは真言を唱えながら、赤い絹の鉢巻で目を隠し、大壇の上に敷かれた曼陀羅の上に柘の葉を投げて、数多くの仏の中から自分と縁を結ぶ投華得仏という守り本尊を決定する儀式である。

しかしMの場合、高野山に行く前に大日如来が現れ、これを守り本尊として決めていた。この経験があるため、密教を学ぶ土台が出来ていたという。Mはカミサマとしてシヨウバイをしているので、その便のため既成宗教の傘下に所属したのである。修行後彼女は、真言宗の権教師となつ

た。

以上紹介したMの個人史の重要点は、俗の世界で病因を発見できなかった彼女が、人里離れた山の中で宗教的修行を行うことでそれを発見できたことである。このような経験は、多くのカミサマの成巫過程と一致している。

(2) 守り神の獲得

赤倉での最初の憑依が契機となり、彼女は最初の守り神を獲得した。この時以後、それまでMが祀っていた神仏などとの関係が再構築される過程が始まった。Mの場合、最初からすべての守り神が明らかになつたわけではない。修行をする長い期間のうちに、関係する神仏が次第に増えてきたのだという。最初の憑依以来、数多くの神仏がMに憑いた。大日様(大日如来)・白髭大明神・十二神様(稲荷大明神・お岩木様・赤倉大明神・猿賀神社(龍神)・七観音・十三仏様(弘法大師・地藏様)というように、Mはシヨウバイの内容に応じ、いわゆる機能神としてさまざまな守り神の名を言う。家にある仕事用の祭壇において、彼女はこういった守り神を拜む。一方、家には家族のための神棚もあり、ここには国つ神である天照大神、氏神である八幡様、また赤倉の龍神が祀られている。このうち天照大神と八幡様は彼女に憑くことはなく、守り神ではない。しかし一言で守り神といつても、赤倉の龍神は、上述した他の守り神とは

言い換えれば、Mと超自然的存在者との(宿命)によって決定されていた関係を、彼女自身が改善するプロセスが始まつたと見られる。彼女は天意に従いながら、「眠っている」関係を修復するようにしたのである。

忘れてはならないのは、カミサマが体験する具体的宗教的な現象は、カミサマ自身の世界観形成に大きな影響を与えているということである。

赤倉沢での龍神憑依後、修行を続けたMは、彼女の守り神を相次いで獲得することとなつた。そして彼女は、守り神から多くの霊力を授けられるようになったのである。彼女の話によると、シヨウバイ中の彼女は、守り神と一体化、精神統一した状態に入る。従つて彼女のもつ靈感の源こそ、守り神から受けた霊力にあると彼女は理解しているのである。守り神の霊力と一体化した彼女自身の身体は、同時に諸神仏のパワーを集中的に受けていることになる。

その意味で宗教体験は、彼女にとって大切な意味を持つ。守り神との宗教的な体験がカミサマとしての仕事を行なうためには絶対必要であるからだ。

超自然的存在は「信号」を出すと彼女は言う。彼女は「感じやすい人」だから、超自然的な存在からの信号を受け取ることができる。加えて彼女は、その超自然的な存在に導かれるのである。「御不動さん、観音様、目に見えないものに操られた。そこに行きなさい、ここへきなさいって

区別されている。それは赤倉の龍神が彼女に最初に憑いた守り神であり、彼女の守り神を獲得する過程の触媒とも考えられるからである。その上、赤倉の龍神は嫁・妻・母として、夫の先祖に対する役割を彼女に眼覚めさせた。とはいえ赤倉の龍神は、彼女に靈感を与えたにもかかわらずシヨウバイの守り神ではなく、家の守り神として祀られている。

修行に入り、赤倉で龍神に憑依された時点から、彼女は霊力を受けたが、それは彼女が守り神を獲得できた出発点とみなされる。その後、相次いで守り神となる多くの神仏に出会うことで、彼女の霊力は上昇したと言う。赤倉の龍神は現在、彼女の表現する「家の霊の地主」として祀られているが、それはシヨウバイの現場では一体化しない。

以上のような一時的な異常な出来事によって、彼女の世界観は大きく変化させられた。長い間苦しんでいても解決のつかなかった病因が、具体的宗教的な体験という奇遇の機会に明らかになった。最初の憑依経験の中に入り混じつた祟り・因縁・(宿命)という彼女の悩み事の要因が龍神によつて示現された。彼女が祟られたことは、彼女の因縁として同じく赤倉で明らかにされた。こうして彼女の人生は、(宿命)に左右されていることが分かつてきた。

自分の因縁が分かつたことで、その因縁に関連した罪を自分自身で全部祓わなければならないと彼女は判断した。

いう声が聞こえるから行くんです」と彼女は語る。

Mの話聞いて気付くことは、守り神が現れる場面が多様なことである。彼女にとっては、宗教体験した場所にも意味が付与されている。例えば京都の伏見稲荷大社へ参拝に行つた際、稲荷大明神の姿が顕現した。その時、稲荷大明神は彼女に力を与えた。その結果として、守り神として祀るようになった。彼女の(宿命)はともかく、その稲荷大明神は大日如来が祀られているお堂の守護のため、彼女の守り神となつたという。彼女の世界観は秩序立っているので、彼女が守り神を拜む根拠は論理的に説明される。そこには、彼女の生活史と具体的宗教的な体験とが結びあわされる傾向がみられる。

例えば、「十三仏様」の薬師如来が出てきた時、「ババツと姿が見えてきた」と言う。そのきつかけは、修行に入る前の話だが、結婚してから、亡くなった両親の供養のために奈良の薬師寺に写経に行ったことにある。その供養から何年も後のこと、ある時その薬師寺の薬師如来が彼女に現れた。「ずっと拜んでいると、自分の祭壇の前にパーと薬師如来がお姿を現したわけ。そのことがあつてから、私は薬師如来を拜んでいる」と彼女は語る。薬師如来は薬師寺の御本尊で、この時以後、供養した彼女と薬師如来との結びつきが開始されるようになったと解釈されている。

カミサマの成巫過程は、決まつたパターンを持つていな

い。従つて、いつ守り神が現れるかは、予測されるものではない。そこでカミサマとなるには、いつ終わるかも知れぬ修行の苦難の中、〈宿命〉的に決定された守り神との出会いを期待しながらのプロセスに耐えることが必要となる。

Mが京都の東寺に参拝した時、大日如來の姿を初めて見た。彼女は、その時の模様を以下のようにいう。

大日如來、色で見た。その時、不思議な現象が来たわけです。そしてあそこでお参りしていたら、光が自分の方にやって来てバアーと体が包まれたわけです。そして周りの景色がぼんやりしてきた。そこに自分の体が大日様が浮き出てきたわけです。

彼女は、大日如來との関係をその時に初めて知ったのである。Mが大日如來との関係を認識したとたん、彼女と大日如來との「眠っている」関係が修復されたものと見られる。成巫過程の中で、彼女の守り神との関係は次第に明らかになった。結局、一番地位の高い大日如來が現れ、全ての守り神が獲得されたという。彼女のコスモロジーの中では、大日如來の下に横一線に並ぶ他の守り神は大日如來の化身で、それらに上下は認められないが、彼女は個人的な好みを示す。特に観音菩薩の慈悲が彼女をひきつけるようである。

しかし彼女の守り神獲得過程が終了しても、彼女の靈感のコントロールとカミサマとして地域社会に受容されるマにはなれない。

言うまでもなく、カミサマの成巫過程は宗教的な通過儀礼である。この儀礼を通じ、その人は俗なる状態から聖なる状態へと転換する。守り神を獲得する宗教的な過程を通つたMがカミサマになること、いわゆる成巫過程は〈宿命〉に定められたものであつたことを想起してほしい。しかも守り神は、同様に彼女の〈宿命〉に定められたものである。つまり自分の〈宿命〉を果たすため、彼女は守り神との縁を認めかつ受入れなければならなかつたのである。しかし彼女は当初、自分の〈宿命〉に気づかなかつた。つまりそのような状態の彼女は、守り神との関係を修復するという〈宿命〉に気づかず、いわば無秩序な状態にあつたのである。

彼女が受けた「祟り」は、彼女が持つ関係が歪んで崩れている状態にあることへの「信号」であつた。「祟り」という宗教的現象は、彼女が受ける「因縁」を知らせるメカニズムでもあつた。Mにとつて「因縁」は彼女と先祖との破綻した関係を象徴している。従つて赤倉の龍神は彼女に先祖との関係を怠つてゐることを告げる媒体であり、「祟り」として彼女は「因縁」を確認することになつたものと考えられる。そこで、彼女が赤倉で〈悟つた〉時、その「悟り」は自身の無秩序な状況を確認したことを意味する。このことは、龍神に憑依された時に明らかになつた。Mが

ロセスはその後も続いた。

守り神として神仏を祀つていても、祀る理由がそれぞれ違つたと彼女は言う。自分の守り神との親密な関係があるということ、彼女はカミサマの仕事を行なう時、自分の守り神以外の神仏とは一体化できない。ひとたび守り神のシステムが完成されてしまうと、この数は増えない。「これがもう決まつてしまつた。もうこれが既に出来上がつてしまつた」と彼女が言う。同様に神仏の数が減るわけでもない。修行経験を年々重ねること、彼女は守り神の構成を選りすぐつた神仏のパンテオンとして完成したのである。要するにカミサマと神仏は、個別には一対一の関係としてスタートしながら、神仏がさらに相互に有機的な関係を取る中で、彼女の宗教的な世界観が構築されてきたということができよう。

三、研究事例における分析

成巫過程研究は、カミサマという宗教的な現象を理解するために重要である。さて、ここで問題の中心に迫ろう。

カミサマが成巫過程に入つている間にカミサマは自分を取り巻く世界を新しく感得する。カミサマは世界観を再構築すると共に超自然的な存在との宗教的な関係に秩序を与える。成巫過程の中からカミサマと守り神という中核的な関係を取り除いたならば、カミサマとなるべき人はカミサマ「閃いた」という表現は、彼女が嫁ぎ先である夫の家における先祖と彼女自身との縁を認めることであつた。龍神並びに先祖と彼女の関係が改善したことは、彼女の守り神との関係を改善するための第一歩でもあつた。彼女の場合、先祖や神仏や家族などとの関係の秩序を修復すること、自分の病気が治つたと考えたのである。病氣は彼女にとり、無秩序で、不調和の関係を指すものであつたとも言えるだろう。

宗教的な関係を改善することは、彼女自身の「救い」の必須条件となる。従つてMの「救い」は守り神との関係を改善するプロセスによつて明確に示されている。神仏との接触がおこり、その結果彼女は靈感を受け、依頼者を助けることが出来る宗教的職能者になつた。

彼女にとつて「救い」は、悟つてから関係を改善することであり、自分の改善した守り神との関係を護持するためカミサマとして他人を救う絶え間ない天職に力を込めて働くことである。これは彼女の〈宿命〉として決められたことである。守り神を獲得するプロセスは、M自身を救うことに他ならなかつた。

カミサマの守り神となる諸神仏は、一般庶民の間でもよく知られているものが多い。例えば、観音菩薩や龍神などである。この点で、津軽地方のカミサマが祀つている神仏は沖繩のユタが祀つているチチガミというユタ自身の祖先

の系譜につらなる上代の祖先霊とは異なり、^(註4)一般庶民が知らない神仏は守り神として祀られていない。さらに守り神が儀式の中で明らかにされる同地方のイタコと違って、カミサマの守り神は、いつとは決まっていない時期に突然に憑依・示現して明らかになる。

カミサマの守り神の構成は、個別に作られるもので、カミサマ自身の〈宿命〉に決定されたものである。それが故に、師匠の守り神とは勿論のこと、他のカミサマの持つ守り神とも異なることが普通である。当然重なる神仏はありうるが、多種多様な神仏が、それぞれの成巫過程の中で現われてくる。そしてさらに守り神を獲得する個別の理由・背景が、それぞれのカミサマ独自の守り神を構成し、カミサマによって異なったコスモロジーを形作っているのである。

四、おわりに

Mの事例を見ると、守り神を獲得するプロセスは、結果的に彼女の世界観形成に影響を及ぼしたことが明らかである。カミサマの成巫過程はあくまでも一人旅であり、Mの苦境を救ったのは彼女自身である。〈宿命〉によって、カミサマは「眠っている」関係、とりわけ守り神との関係を修復するのである。

以上の理由から、筆者は成巫過程に注目した研究を推進

し、日本的シャマニズムの一層の理解を深めるに際し、守り神への注目に大きな意義を認めたいと思う。カミサマにおける守り神獲得過程を引き続き研究することによって、この観点の意義は強められるものと思われる。

筆者自身、実見を許されたケースはまだ僅かであり、現段階では一般的特性を論ずるには至っていない。本稿において、一つの事例を叙述するにとどめる。

註1 十二天は帝釈天、火天、焰魔天、羅刹天、水天、風天、毘沙

門天、伊舎那天、梵天、地天、日天、月天を指す。

2 十三仏は不動、釈迦、文珠、普賢、地藏、弥勒、薬師、観音、勢至、阿弥陀、阿闍、大日、虚空蔵である。

3 カミサマが持つ祟り・因縁罪障・救済といった観念については池上良正『津軽のカミサマ―救いの構造をたずねて』(どうぶつ社、一九八七)参照。

4 大橋英寿『沖繩シャーマニズムの社会心理学的研究』(弘文堂、一九九八)、二六頁。

(〒031-0111 青森県三戸郡南郷村大字市野沢字市野沢平五二)